

30年目のマリに出かけます

代表 坂場 光雄

サヘル地域の砂漠化防止活動をマリ共和国で開始してから、2016年1月で30年目に入りました。

首都バマコの街ではこの数年で交通信号も設置されはじめ、役所の前には立体交差の道路もできました。ニジェール川にも三本目の橋が出来て、道路の整備が進んでいます。大きなビルも建設され、住宅地も拡大しています。近くの市場も粗末な小屋からコンクリートの建物になりました。市街地には自動車、バイクがあふれるようになり、幹線道路では自動車とバイクの分離交通が実施されています。人々は道路にあふれ、自動車の間を縫うようにして歩いており、交通事故も多発しています。

バマコ周辺の治安は、今のところ、落ち着いているようです。治安ばかりでなく、日本でも事件、交通事故等が多発しており、絶対安全な場所はないということを認識しています。何が起ころうとも対応できるように、体調、行動、自動車の整備等に注意します。

郊外の農村地域では天水農業で雨の具合を見ながら、耕作が行われ、アワ、ヒエ、トウモロコシなどの栽培が進められています。2015年は雨季の6月になっても雨が少なく、地域苗畑では井戸水が枯れて、苗木作りが遅れたところもありました。干ばつで農作物の生育が心配されましたが、何とか収穫できたようです。村での暮らしはなかなか厳しいようです。

村では相変わらず樹木が切られ、マキや炭、資材として都市に出荷されています。2004年には樹木の伐採禁止令が半年にわたって実施されましたが、樹木の減少には歯止めがかかっていない状況です。都市に住む運転手のトラオレ氏は、この10年ほどでマキの値段が3倍に上がっていると言っています。

ファナ地域で活動を始めて10年目になります。小さな地域苗畑の苗木育成協力で、村をまわっての苗木配布・荒廃地植林試験、学校林育成などを進めてきましたが、住居内の緑陰の樹木、菜園の果樹などとして少しずつですが、緑の塊として目にするようになってきました。バオバブは葉を採取して食用に利用されているようです。耕作地内にユーカリ林を作り上げる人も出てきました。苗木づくりを進めるための研修も少しずつですが、実施してきました。

70か所を超える村、地域、学校などを対象としておりますが、対象地の情報、どんな人がどんな暮らしをしているかの理解が不十分な面があり、どのように樹木を育てているかがイメージしにくいと声がありました。

2016年夏はこれまでと同様に苗木配布、荒廃地試験植林などをするとともに、時間の関係からすべての村を把握するのは困難ですが、少しでも村人の暮らし、様子がよりわかるように、見てきたいと思います。

5月のバマコは気温が35-40、雨が降るとスーッと気温が下がります。6月初めからはラマダン（イスラムの断食月）も始まり、昼間食事をする食堂などが休みになって、活動しにくい面もありますが、体調に気を付けて、活動したいと思います。

【坂場派遣スケジュール】 5月27日成田発 7月27日帰国予定

マリ人スタッフの奮闘記

榎本 肇

日本人の派遣期間以外はマリ人スタッフがサヘルの森の活動を進めてくれています。今回はトラオレさんが慣れないパソコンを駆使して届けてくれた報告書から、11月～4月の乾期の活動についてご紹介します。

一人三役のマリ人スタッフ

現在、活動を進めてくれているスタッフは2名。一人は、運転スタッフ兼通訳兼現場コーディネーターのママドゥ・トラオレさん。もう一人はバマコ事務所の門番兼苗畑管理スタッフ兼作業補助のコニバ・ジャラさんです。二人ともバマコ市内に在住して、日本人不在のときには、月に2～3回、現場に出張して、活動を進めてくれています。



マリ人スタッフのトラオレさん(左)とジャラさん

里山再生実践者をサポート

昨年1と10月に里山再生に関する技術や知識を学ぶ研修を行った7名の村人たちは、それぞれが自身の里山で生産活動を始め、里山再生を実践しています。

7名の村人たちは活動の内容も進み具合も様々ですが、マリ人スタッフ達は定期的に各自を訪ね、実践者達をサポートしています。

ある村人は自生するズィズィフィスの自生種に改良種を接いで、大玉の果実を収穫し始めています。接ぎ木後の剪定などはマリ人スタッフが主導して村人と行いました。

また、複数の村人は里山をアカシア・セネガルの生垣で囲おうと苗木の育苗を始めています。No.98 2016.6 サヘル

す。初めて行う苗木栽培ですので、上手く発芽しなかったり、水やりが不十分だったりとなかなか上手くいっているとは言えません。そのあたりもスタッフが一緒に播き直すなどしてフォローしています。



アカシア・セネガルの苗木作り

試験地・見本林の木々に水やり

昨年、見本林に補足した苗木に関しては、今乾期に灌水して生育を助けています。近くのニヤマトブグー村の井戸から20のポリタンク16個に水を汲み、試験地に車で運んで苗木一本一本に水やりをします。



ニヤマトブグー村の井戸で水汲み

ユーカリ材が売れた

2007 年頃から活動を始めたファナ地域では開始当初配布した木々が大きく生長して、いろいろな場所で遠目からも確認できるようになっています。



イーサ・ジャラさんのユーカリ林

配布した苗木の一つユーカリもその一つで、あちこちに小さな林ができています。今回届いたトラオレさんからの報告では、カソマブグーのイーサ・ジャラさんが育てたユーカリ材を伐採して、50,000CFA で販売したとありました。また、自身でも伐採した材を使用して日除け屋根を 3 つ作っています。隣村の村人も同様に 47,500CFA で販売したとありました。

自然に生える木が少なくなっている今、建材に使えるような太い材として、ユーカリの重要性が高まっています。木を育てるには時間がかかりますが、着実に林が育ち利用されているのを聞くと私達としても励みになります。

こうした村人たちからの情報収集もトラオレさんの仕事です。

【訃報】 アルーさん トンブクトゥの 1 ガイド

サヘルの森（会）を活動当初から支えてくれた友人がまた一人亡くなりました。

マリからの連絡では 3 月 19 日に首都バマコの病院で病気のため亡くなったとのこと。たしか年齢は 60 代半ばだったと記憶しています。下の子は高校生くらいだったのではと思います。日本の感覚ではまだ若い 60 代で亡くなったアルーのご冥福を謹んでお祈りします。

アルーは、自称トンブクトゥの 1 ガイドというだけあって、本会のマリでの活動開始時には地理にも人間関係にも不案内な日本人のガイド役として手助けしてくれました。

ラクダで旅する砂漠ガイドですから我々の車の道案内などはお手の物でした。トンブクトゥからティンナイシャまでラクダでテレックスを届けてくれた話は有名ですが、マリ人と日本人の間に立って、こじれた人間関係を交通整理する能力にも長けていました。

私がマリに居た頃には、彼は既にトンブクトゥのトアレグ界では顔役的な存在でしたが、フランス語が達者な事もあって行政長官や軍にも顔のきく頼りになる存在でした。しかし、顔役といっても威張るようなコワモテではなく、いつの間にかスーッと中に入って話をまとめてくるようなタイプでした。「ニヤマニヤマだよ！」と言って、一本だけの前歯で笑いながら部族間の利害を調整してくれたことを思い出します（ニヤマニヤマとはぐちゃぐちゃとか得体の知れないことを意味します）。

自らも内戦の犠牲になりながら、いつもお茶目に「石頭！」とか「頭が壊れてる！」とか言って暴走しがちな日本人をマリ人代表として批判してくれました。反対に子供には優しく、焼肉の時には必ず「つぐ（娘）の分だから」と食べやすい部位を取り分けてくれましたことを、なつかしく思い出します。

（高津佳史）



トンブクトゥ事務所のアルー（1999 年）

サヘル現場から東京の森へ

杉野 二郎

かつてサヘル（会）のスタッフとして現場で植林をしていました。毎日がキャンプ生活のような日々で砂まみれになりながら過ごしてことを懐かしく思い出します。

そんな私ですが、今は東京の西にあるあきる野市で森林レンジャーという肩書きで働いています。実際の仕事は多岐に渡りますが、最近では市内の野生動物の調査に重点を置いています。市町村レベルで自然資源の調査をすることは大変珍しい取り組みです。

あきる野の自然環境

日本に生息する大型哺乳類は、ニホンザル、イノシシ、ニホンジカ、ニホンカモシカ、ツキノワグマ、ヒグマの6種類と言われ、あきる野市にはヒグマ以外の5種類の大型哺乳類全ての生息が確認されています。東京とはいえ、西端に位置するあきる野市は自然が豊かな場所といえます。

豊かな自然を担保する条件として、多摩川、秋川に挟まれた地形で河川丘陵と河岸段丘の作る平地から始まり、西へ進むと秋川が渓谷を作り、急峻な山地になり標高900m前後の山地までを含んでいます。日本は狭いと言われますが、あきる野市は河川環境、丘陵環境、畑地（平地）、溪流、亜高山帯などバリエーションに富んでいます。このあたりの自然条件の多様性はサヘル地域とは大きな違いがあります。当然、様々な条件を利用する動植物も多様です。

東京のツキノワグマ

この地で生活すると、自然の豊かさゆえに発生する問題が多くあります。特に野生動物の農業被害はイノシシ、サル、タヌキに始まり、外来種のハクビシン、アライグマが上げられます。予備軍として、ニホンジカ、ニホンカモシカの畑地への侵入が将来の問題です。また、堅果類（ドングリ）の凶作の年には、市街地にツキノワグマが出てくることがあります。実際に2012年には、親子3頭のツキノワグマが市街地に出て大きな問題になりました。

人と森との関わりが希薄になってきた現在の生活の中で、クマの動向について誰も把握していなかったために行政、住民などにパニックを起こしました。その後、独自にクマの痕跡調査を進めると、古いクマ剥ぎなどの生息痕跡が人家周辺でも確認できました。それは、私たちが知らなかっただけで、実際にはクマと隣り合わせて暮らしていた証です。調査をしながら東京のあきる野市に複数頭のツキノワグマが継続的かつ安定的に生息していたことに自分でも驚いています。

クマは臆病な動物で、普段は人との接触を極力避けるように注意して活動している姿が見えてきました。クマの移動経路を見ると尾根のハイキングコースと麓の人家の中間の標高700~500m付近を水平に移動しています。シカのように特定の獣道を持たないクマは、大きな凶体で藪漕ぎしているようで、草が潰された跡が森の奥に続いているのを目にすることがあります。時折、ハイキングコースのある尾根道を横切って移動する時などにハイカーに目撃されることとなります。

母グマから子グマへ

クマは冬眠するから冬は安全という話を聞きます。一方で、東北のマタギが雪原にクマの足跡を追って、猟銃で仕留める映像を思い浮かべる人も沢山います。

クマの場合は、仮死状態になる冬眠はしません。越冬中に潜り込んだ巣穴が気に入らなければ「穴換え」といって別の越冬場所に移動します。また、雌グマは2月に出産し、授乳をしながら春を待ちます。

越冬を終えて、春になると母グマは子グマに餌の取り方を教えながら1年半ほど一緒に暮らします。そのため、クマの採食行動は母グマから子グマに代々引き継がれます。特に、クマ剥ぎなどの特殊な採食行動は地域により異なり、それぞれの特徴が顕著に現れます。あきる野では、胸高直径で50cm前後のスギが好まれています。極まれにあきる野でもヒノキのクマ剥ぎを確認します。初めは、スギとヒノキを間違えた情けないクマとと思っていましたが、調べていくと、奥多摩ではヒノキがクマ剥ぎされている地域があると聞きました。ヒノキのクマ剥ぎは樹種を間違えたアホなクマではなく、奥多摩からの侵入個体だとの結論になりました。

母グマが大径木の杉皮を鋭い爪で剥ぎ取り、樹皮下の形成層を露出させて、後ろ足で立ち上がり、150cm ほどの高さまで前歯でしごく様にして掻き取って食べます。私の勝手な想像ですが、子グマは母グマの足元で真似をするように 40cm 位の小さなクマ剥ぎを行うと考えています。実際に、高さ 150cm の大きな歯型のクマ剥ぎの下に小さな歯型がついているのを目にします。はっきりと親子の痕跡を残すのは、このクマ剥ぎだけで、子連れれのクマの存在が確認できます。母グマは 1 年半ほど子グマと行動を共にして、子別れをします。この時、母グマが姿を消し、残された子グマは母グマと暮らした地域で独り立ちしていくようです。置き去りにされた子グマは、母グマと回ったように行動すれば季節毎の餌にありつける道理になります。その後、単独で初めて越冬、前年に母グマとクマ剥ぎをしたスギに戻ってきて少し成長した高さ 80cm ほどの歯型がついたクマ剥ぎが見られます。いかにも、母グマに教わったクマ剥ぎを復習しているような感じです。

前年まで、母グマの跡をついて回っていた子グマが、単独になって初めての越冬を終えて、春にクマ剥ぎをしている痕跡を見つけると、思わず、「ガンバレ、チビ助」と声をかけたくくなります。

東京西部では、ツキノワグマが確実に増えています。狩猟禁止になってから増えたとの話もありますが、長年保護されてきたニホンカモシカは、近年になって急激に増加しています。狩猟鳥獣のニホンジカも増えています。

多くの森はスギ・ヒノキ林の人工林です。森林性の大型哺乳類の増加の理由は何でしょう？



あきる野の子グマ（杉野氏提供）

人の暮らしと野生動物

全国的に、シカ・カモシカ・イノシシなどの畑地への侵入や、市街地でのクマの徘徊など人との接触が増えています。山に餌がないから食べ物を求めて人里に下りてくるといわれます。そして、人里で安易に採食出来ることを覚えた動物は、山に戻らずに人里を生活圏に取り入れて行動して人との接触が増えているといえます。

しかし私は、もともとの動物の個体数が増えたために人との接触が増えたと考えています。

実際、絶滅が心配されたニホンカモシカは近年、急激に増えています。ニホンジカも雌の狩猟禁止など狩猟制限が付けられたりしていましたが、やはり近年になって急激に増加しています。

森を含めて動物の痕跡を見てきた経験から言えることは、1960 年代の拡大造林でスギ・ヒノキ・カラマツなどの針葉樹が全国規模で広大な面積に植林され、現在は林業が衰退したといわれていますが、実は森は大きく育っています。植林当時は、針葉樹林では野生動物が暮らせないとされていました。しかし、年月が過ぎて、それらの森も老齢林になって、多くの大型動物が暮らしています。近年、シカ、カモシカ、サル、イノシシ、クマが増加していることと人工林の林齢と大きな関係があるのではと思っています。若齢林や壮齢林では野生動物を養うことが難しく、その数を増やすことが出来ませんでした。近年、それらの森が人の手を離れて老齢林へと変化してきた結果、森が大型哺乳類を養うことが出来るようになってきていると考えています。

70 年近い大径木の森は最後の間伐を終えて、美しい疎林になっています。疎林では地表に太陽光線が届き、林床の植生も復活しています。広葉樹林の藪に比べて、大径木の針葉樹林は見通しもよく、臆病な動物にとっては絶好の隠れ家になっているようです。

このような、動物達に住みやすい環境の森が、中山間地域の集落の家々の裏から始まっています。動物達は森から顔を出せば人家の裏庭にカキが突っていたり、畑が広がっていたりするので人の生活圏に簡単に侵入してきます。

昔は人の生活圏の周りには薪山があり、定期的に伐採され、茅場は毎年手火入れが行われ、森と人の生活圏の間にはバッファゾーンが存在していました。しかし、これから薪や炭の生活を茅葺屋根の家で行うことが難しいなか、大型野生動物とどのような距離をもって暮らしていくかが、日本の生物多様性実現の課題だと感じています

1526 番目の会員の サヘル との物語は 2007 年に始まった。

宮代 裕子 (会員番号 1526 番)

その時にはもう、有名なボランティア団体であることを実感していた。初めてマリに旅行したときのことである。15 名くらいのツアーだったのだが、参加者全員が「サヘル」の会を知っていたのだ。暑さ・デコボコ道・食あたりなどで毎日誰かが体調を崩すなかで、「なぜマリに？」と尋ねられると「知り合いがボランティア活動をしていて、楽しそうに話すので」と答えていた。ぼーっとしている頭に小島さんの顔が浮かんで、騙されたのかな？ ドゴン地方にも行けなかったし、もう 1 度来るようかな...？ そんなことも考えていた。

そして、2009 年に再びマリへ行くことになった。期間は 2 週間で、マリは乾季。ここでサヘル地帯の農村を訪れる機会に恵まれたのである。「サヘル」の活動について興味を持ち始めたのはこの頃だった。

日本で暮らす私にとって、「木を植える」というのは、植える場所を決め、苗を買ってきて、穴を掘って、苗を穴に突っ込み、土を戻して根元をギュウギュウと踏みつける。あとは放っておいてもそれなりに育ってくる。緑に囲まれて幸せなのはつかの間で、そのうち大きくなりすぎて邪魔になってくる。最初は枝だけ切っただけののだが、その切り落とした枝の処理に苦労する。どんどん伸びる木を前に、これは大変！ さっさと根元から切っしてしまおう！ 皆様からお叱りを受けそうな、こんな具合であった。

サヘル地帯はサハラ(砂漠)の岸辺なので、地面は砂や岩ばかり。穴を掘るのも大変だし、苗木をただ穴に突っ込むだけでは木は生き延びられない。苗木もどこでも手に入る状態でもなかった。水も井戸から人力でくみ上げる。そのままでは放し飼いのヤギの口の届くところにある葉は全て食べられてしまう。燃料にも薪が使われるので、人間にも伐られてしまう。感じたことは様々な
No.98 2016.6 サヘル

だが、突き詰めれば、「木を植える」ことが現地の人にとって意味を持ち、かつ、必要とされているという事だった。そして、「木を自分たちの手で植えてもらう」ためにしなければならぬことがあり、それを「サヘル」の現地活動が試行錯誤しながら担っているのだというのが私なりの解釈で、すごい活動だなと感動した。

それでも、すぐに入会しなかった。入会したのは 2010 年で、前回の執筆者の松永さんが 1993 年ということだから、17 年もの差がある。法人化も済み、ティンナイシャも代々木上原の事務所もない「サヘル」である。

入会までに時間がかかった理由を書きおきたい。ひとつ目は「サヘル」の会を助ける人たちは大勢いて、ひとりふたり増えても減っても同じなのではないか。2 つ目が長く続けてきた中に、何も知らない人間が加われば迷惑になるのではないかと心配であった。

今は、「サヘル」が多くの人々に支えられてきた事、そしてこれからも一人でも多くの人に支えられなければ存続出来ないという事がわかってきた。これは、図々しい話であるが、ほとんど働かない口だけ監事である私の自己弁護でもあり、同時に、皆様への支援のお願いでもある。支援の方法はいろいろで、イベントブースを覗きに行くのも、機関紙などの感想をつぶやくのも、ひとつひとつが確実にスタッフの励みになる。

いつかまた、マリを訪れてみたいと思う。今度は雨季に。

最後になってしまったが、マリを含めて世界中で戦争やテロの心配がなくなる日が来ることを願ってやまない。

以上が、私の会員番号物語である。

編集注) 筆者が会の名称変更(法人化)を知る前と後で「サヘル」の会」と「サヘル」の森」を使い分けています。

.....
...会員番号は整理のための数字ではない。
会員番号にはひとつづつのドラマと息がある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。(サヘル」の森)

国内活動(12~5月)

< 総会・報告会 >

- ・ 1/30 榎本帰国報告会 JICA 地球ひろば
- ・ 3/26 会員総会 JICA 地球ひろば

< 広報 >

- ・ 5/20 マリフォト通信発行

< 学校との関係 >

- ・ 1/22 横浜市立浦島丘中学校
牛乳パック回収(坂場、榎本)
- ・ 2/3 横浜市立浦島丘中学校
「廃品回収収益金委託式」出席(坂場)

< 定例活動 >

- ・ 12/19 行徳公園・自然動物園と船堀
- ・ 1/16 浅草七福神めぐり
- ・ 2/20 赤坂の桜町公園と青山公園
- ・ 4/19 祖師谷公園、蘆花恒春園、北烏山寺院群
- ・ 5/21 目黒区のため池と社寺を巡る

アフリカンフェスタ in ズーラシア に出展

4月23日(土)、24日(日)に、横浜市旭区にあるズーラシアで開催されたアフリカンフェスタ in ズーラシアに出展しました。

会場ではサバンナ園の開園1周年記念イベントや旭区と関係のあるコンゴ共和国のミュージシャンのプレコンサートなどが開かれました。23日(土)は良い天気にも恵まれましたが、24日(日)はあいにくの天気でお客さんの入りも非常に少ないものでした。

主催者はアフリカヘリテイジコミティというガーナで小学校建設などを行うNGOでしたが、出店者のほとんどが業者でした。代表のトニー氏を中心としたアフリカ人のネットワークでできているイベントです。

業者さんの中にはアフリカグッズ販売を行っていたバマコ出身で練馬区在住というマリの方もいらっしゃいました。また、ステージでコラというアフリカの伝統弦楽器を弾いていた日本の方は、著名なマリ人ミュージシャンに師事して、演奏を学んだとのことでした。

広報という面では物足りなさを感じましたが、アフリカを満喫できたイベントでした。

(榎本肇)

みどりとふれあうフェスティバルに出展

5月14日(土)、15日(日)に東京都千代田区の日比谷公園でみどりとふれあうフェスティバルが開催され、サヘルも出展しました。

2日ともよい天気でしたが暑すぎず、とても良い行楽日和になりました。

サヘルブースは、広場の角のテントで隣のブースとの間にケヤキがあったため、広いスペースが取れました。

いつものパネル展示や物販に加えて、坂場代表がマリから持ち帰ったバオバブの実と種の販売と昨年同様、泥染め体験を行いました。

バオバブの実については、以前にも展示品を譲ってくれないかという話しもあったくらいなので、もう少し売れるかと思いましたがぼちぼちでした。

一方で、昨年バオバブの種を買って播いて上手く育っているとか、実は家でバオバブを育てているとか、バオバブの花(写真)や実を初めて見たとか、、、ブースを訪れるお客さんとのやり取りも楽しいものでした。

このイベントは林業・森林関係の機関、木工関係、森林を使った環境学習などの団体が参加していることもあって、サヘルのような環境NGOのブースは数が少なく、改めてサヘル存在意義を感じました。

(榎本肇)

牛乳パック回収

2月3日に横浜市立浦島丘中学校の資源回収委託式に出席してきました。1988年からですので、今年で28年目になります!

学校から資源回収に出したアルミ缶と1月22日に回収した牛乳パックの代金、合わせて5,929円を寄付していただきました。

式は1、2年生全員参加で、体育館で行われました。指導要領が変わったとかで、発表が簡素化されましたが、生徒さんによるサヘル紹介もありました。

サヘル活動についてお話ししたあと、花束贈呈があり、生徒会役員と写真を撮りました。自治体やスーパーでの資源回収が普及する中で、継続して御支援下さる先生と生徒さん方のご協力に感謝致します。

定例活動(7~11月)

7月以降の定例活動の予定です。坂場代表とぶらぶら散歩をご希望の方は、事前に事務局までご連絡下さい。

7月20日(土)10:30 集合
多摩川自然館と古天神公園(上布田遺跡)
多摩川周辺の遺跡めぐり
小田急線・狛江駅改札

9月17日(土)10:30 集合
戸山公園 - 乙女山自然公園
山手線内で最高峰がある公園とホテルを飼育する公園
JR山手線・新大久保駅改札

10月15日(土)10:30 集合
西新井大師 - 舎人公園
関東厄除け三大師の一つと池と湿地のある公園
日暮里舎人ライナー・西新井大師西駅改札

11月19日(土)10:30 集合
都立城北中央公園と石神井川
城北地区最大の運動公園と神社・巨樹
東武東上線・ときわ台駅改札

サヘルキャンプ

夏の暑い時期ですが、会員交流、自然観察、技術研修等を目的として開催します。自然に親しむと共に、料理や工作、手作業などで楽しみます。子供さんでも楽しめるイベントですので、ご参加をお待ちしております。

8月20日(土)
場所：横浜市瀬谷区中屋敷作業場
集合：相鉄線・瀬谷駅北口 10:00
瀬谷作業場 10:30
持物：長袖シャツ、前掛け、タオル
虫除け薬、飲料水
費用：実費清算(主に食品代千円程度)

*参加希望者は、事前に事務局までご連絡下さい。

七夕募金のお願い



夏季恒例の七夕募金へのご協力をお願いいたします。短冊には平和への願いを込めたいと思います。同封の振り込み用紙をご利用下さい。

苗木募金で里山再生

2004年から始まった里山再生プロジェクトでは、苗木募金への御協力もお願いしています。

苗木募金は一口2千円から受け付けていきます。マリで1本の木を植えて育てていくためには、スタッフの派遣費用も含めておよそ2千円の資金が必要となるためです。(なお、募金の際は「苗木募金」と明記下さい)

会費納入にご協力ください

NPO法人『サヘルノ森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000円
- ・維持会員 年 20,000円

特定非営利活動法人 サヘルノ森

住所：〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403 (株)エコプラン内
TEL:042-721-1601 (留守電対応)
FAX:042-721-1704
郵便振替口座:00170-6-115054

HP:<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>

BLOG:<http://sahelnomor.exblog.jp/>

E-mail:sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No.98 2016年6月26日発行

発行人:坂場光雄 / 編集:高津佳史
